

中身ばかり、立派

saolipoooh

季節は、いつだって冬だった。空気は芯から冷え切って、暖房は外気で故障している。雪さえ降らずに、空気はただ澄み切り、それでいて太陽はいつだって雲に覆われて灰色だった。

男が一人、歩いている。それほど若くはない。けれど初老というほどではないだろう。私たちは彼を「K」と呼ぶこともできる。しかし名前は必要ないだろう。この話には男は一人しか出てこない。

冷酷な風が吹いて、異邦人である男はおののいた。厚手のコートをしっかりつかんで歩くが、裸の顔は、風から逃れられずこわばっていた。マフラーに顔をうずめてなんとか耐えようとするが、それももう限界を超えていた。男は、道にカフェがあるのを見つけた。

カフェに入ると、男は驚いた。そこで見つけたのは、およそカフェらしからぬものだった。冷たいコンクリートの通路に広い内部、壁際にはガラスケースが並べられ、矢印の描かれていた案内標識がところどころに出ていた。男がカフェだと思っていたのは、実は博物館だったのだ。入り口にほど近いカウンターから、制服を着た受付嬢が近づいてきた。

「いらっしゃいませ。チケットはお持ちでしょうか？」

彼は顔を横に振って、外観から、ここが博物館だとはわからなかった、と言った。

「そうですか？」

受付嬢は、目を丸くして、彼をまじまじと見つめた。男は、この博物館はそんなに有名なのか、と思った。受付嬢は、たっぷり15秒ほど彼を見つめていたが、彼から満足な答えを引き出すのをあきらめたように、ふっと視線を外すと、感情の読めない笑顔を向けた。

「そうかもしれませんね。ここは、中身ばかり立派なもので。」

その笑顔は、完璧な笑顔なのに、笑いの要素がまるでないという、彼が人生のなかで初めて見た類の笑顔だった。受付嬢の笑顔につられて、彼も不器用な愛想笑いを浮かべた。客観的に自分を見たら、このくらい不完全なほうが笑いにはふさわしい、とさえ思えた。

受付嬢は、この博物館についての長い説明を行った。男は、その話のあまりの長さに辟易し、一度受付嬢の話を遮りさえした。

「いいんだよ、勝手に見るから。そもそも、ここには温まりに来ただけだからね。」

「そういうわけには、まいりません。法律で決まっています、当館についてきちんと説明をして、同意された方のみ、同意書にご署名のうえ、はじめてチケットをお渡しすることができるのですから。」

「わかった。じゃ、署名はするよ。とにかく、この入り口はひどく冷えるよね。まさか、この中のほうがもっと寒い、なんてことはないよね？」

「その点につきましては、201条の説明事項に載っております・・・」

男は、うんざりした。どうして、ここをカフェだと勘違いしてしまったのだろう、と思った。けれど、入り口（すなわち、今は出口となっている）を振り返ってみると、ドアにはめ込まれたガラス窓から、灰色の冷たい風が街道沿いの木々を揺らしているのが見えた。すると、また外へ出ていくのも億劫と、男は改めて受付嬢に文句を言った。

「ああ、もういいから。サインするよ、同意書はどれ？」

すると、受付嬢は、笑顔を消して、またまじまじと彼を見つめたが、しかし、ある決心をしたように、同意書を持ってきては男に署名をさせ、大きな辞書を彼に渡した。それは、辞書ではなく、約款だった。小さな字で、この博物館の説明が書いてあった。ちらっと、男が約款を見たところによると、「当館にて起こりうる事故について」という項目があり、「床につまづいて転び、打ちどころが悪かった場合、死に至る可能性があります」と書いてあった。彼は、急いで約款を閉じて小脇に抱えた。受付のカウンター横に設置されていたコインロッカーに預けようとしたが、全て読んでないのに、持ち歩かないなんて許されない、と受付嬢にまたもやとがめられ、譲らないので、男は仕方なく、大きな約款を抱えたまま見物をする事になった。まだ寒さが残るので、コートも着たままだった。チケットを受け取り、受付をようやく済ますと、男は歩き回った。

順路案内の通りに、ガラスケースが並べられている間を歩いた。ガラスケースには、様々なものがおさめられていた。宝石や、首飾りのようなアクセサリ、椅子や机といった家具、ケトルやカップ、オーディオセットや大きなものになると、車やタンスといったものもあった。それらは、あまりにも一般的なもので、特異な点はないとも言えた。しかし、全てにおいて共通していることがあり、それは、全て切断されており、きれいな切り口を見せ、普段見えない断面をさらしていた。ここは、切断したものを飾る博物館だったのだ。

歩いていると、またもや制服を着た女性が近づいてきた。腕には「案内係」と書かれた青い腕章がつけてあり、彼は案内係の女性に話しかけられた。

「ここは、人が自分の大切なものを切断して展示するところなんですよ。」

彼女は、そう言うと、ガラスケースのなかのキャプションを指さした。物の名前と種類、材質が書いてあり、横に人の名前が書いてある。おそらく、持ち主の名前なのだろう。

「この奥に、切断のための大きな機械が置いてあるのですよ。展示の最後に、あなたはそれを見ることができます。そして、あなたも何か大切なものを切断することができるのです。」

案内係のアーモンド形の目は、モディリアーニの絵のように灰色で、何の感情も見ることができなかった。

「大切なもの、なんですか？要らないものではなくて？」

彼の質問に、案内係は動じなかった。

「もちろん、大切なものに限ります。あなたはまだ当館の展示のほんの一部しか見ていないから、わからないのです。あなたが展示を最後まで見終えた頃には、あなたは何を切断すべきなのか、わかっているはずですよ。」

およそ占い師のような断定する案内係の物言いに、彼は不安になった。どうして、自分の大切なものを切断する必要があるのだろうか？と思うとともに、しかし同時に彼の心の奥から、自分も何か切りたい、という気持ちがむくむくと湧きあがってきたのである。しかし、彼自身、自分のその衝動をきちんと認識することができずに、漠然とした不安にそわそわしているだけであった。

彼は、案内係に導かれるままに、展示品を見ていった。

案内係が言うには、ここにあるものは、大き2つに分かれる。すなわち、生物と無生物である。生物といっても、標本やはく製にしたものであるから、ほとんど無生物といってもいい。つまり、元生物といってもいいものだった。しかし、かつてのペットや愛すべきコレクションである標本も切断の対象であることに、男は少なからず驚いた。そもそも、大切なものを切断したい、という気持ちに異常性を感じ、ほとんど恐ろしくなってきた。しかし、お化け屋敷やジェットコースターが遊園地でのもっとも脚光を浴びるアトラクションの一つであるということが示す通り、恐怖感はその好奇心を煽る存在であった。彼は、この展示品を持ち込んだ異常な人々の、異常な心理状態を垣間見ることに「怖いものみたさ」という文字通りの心理を抱きながら見ていた。

カメラや時計といった精巧な作りのものの中身を見ることは、非常に興味深かった。ぜんまい仕掛けやもう動くことのない複雑な機械や構造は、かつての美しい動きを見せることはもうないのである。彼は、言葉が胸の奥から湧きあがってくるのを感じた。

「まるで墓場だな。」

その表現に行きつくと、彼は、ほとんど歓喜に溢れ、自分の言葉に元気づけられて饒舌にしゃべりだした。

「ここは、まるで墓場だ！自分の大切なものをわざわざ切るなんて。使い道のないものにして、ただ壊れた中身を見るだなんて。そんな恐ろしいことを公共の施設が行うなんて、まったく、おかしいことだ！私の国ではありえない。私の国だったら・・・。」

「あなたは、本当にそんなことを思っているのですか？自分のお気持ちでないことを言葉にするのはやめたほうがいいでしょう。『あなた』が、そんなことを言うなんて。」

男は、その案内係の言い方に腹を立てたが、少しムツとしただけで、抗議はしなかった。たしなめられた子供といった形だ。

「君は」男が再び口を開いた。

「私も、大切なものを切断することができると言ったね。みんな、ここに大切なものを切断して展示していくのだと。」

「言いました。」

「私は、そんなつもりでここに来たんじゃないから、何も持ってきていないよ。」

「それは、何か切断したいのに、持ってない、ということでしょうか。」

「いや、そんなことは言っていない。もちろん、何かを切断したいなんて、別に思っていないよ。」

男は、ほとんど糾弾された犯罪者の心境でそう言った。

「ピカソの絵を、ご覧になったことはございますか？」

「わたし？ああ。もちろんだ。彼の絵は、もちろん・・・」

「あれだけ立派な絵を私は他には知りません。見事に切り裂かれた人物たち。本当に、立派なものだけが、色彩により強調され、美しさを表現する。あの画家は、単なる画家ですが、しかし、

本当の目を持った人間であると言えるでしょう。」

「それなら、ピカソの絵を展示すればいいじゃないか。どうして、物を切断する意味があるんだ。だいたい、君みたいな単なる案内係が、世界的な……」

「学術的なことに、意味のあることはありません。すべての意味のないものが意味を持つのです。」

「私には、わからない。私は、学者じゃないのだから。」

「そうでしょうか。」

ときどき、この案内係との会話には、どこかしら言葉が通じない、会話として成立していない部分があるという感じがする。ここが外国だからだろうか、と男は思った。

館内を進むごとに、彼の落ち着かない気持ちは強くなっていった。床は、完璧に磨かれていた。それは、埃の存在を許す余地もなかった。そのため、少しの暖気さえも、床に落とすまいという決意さえもみられた。恐ろしく寒い館内にも関わらず、男は、自分の頭がやけに熱くなっているのを感じていた。体は、ガタガタと震えるほどなのに、頭ばかり熱い。隣を歩く案内係を横目で見たが、案内係は、薄い制服と黒いタイツといった出で立ちで、十分快適に過ごせるようであった。寒いとか暑いといった感覚を持ち合わせていないような案内係を見ていると、悪態をつきたくなるほどに、男は不快感でいっぱいだった。何か病気を患ってしまったに違いない。案内係は、しかし、そんな客を相手に根気よく説明を繰り返していた。何個か展示室を通りぬけ、それら全てにさほど差異を感じないまま、男は案内がいつまで続くのか、と途方に暮れた。それでも、まだ案内係の根気は続いた。そして、案内係は、これまでの展示のなかでも、一際大きなガラスケースの前に立ち止まると、男の目を見た。

「さて、あなたが本当に見たがっていたものをご紹介します。」

男は、案内係から目を離し、ガラスケースを見た。それは、もうずっと前から目の端に映っていたものだった。しかし、本当に目の前に来るまでには、それが本当に展示されていることが信じられなく、信じたくないという気持ちから、無意識のうちにあまり見ないようにしていたものだった。しかし、案内係が、手を差し出して、その展示物を見るように促すと、彼は逆らうことはできなかった。彼は、ちょうど半分になり、器官から腸といった内臓も、血管も、骨もすっぱりと切断されている裸の女性・・・すなわち、切断された彼の妻をそこに見た。

彼は、急に泣きじゃくり、胸におさえていたものを吐き出すように大声で叫んだ。それは、言葉にはならなかった。

案内係の女性は、驚いてアーモンド形の目を丸くした。

「どうなすったんです？そんなに泣いて。ここは大声を出すような場所ではありませんよ。」
たしなめられて、男は、案内係の胸倉をつかんで叫んだ。

「お前は、お前は、自分の妻が殺されて、博物館に展示されているのをみて、どうにかならないような奴がいると思うのか！」

案内係は、それでも取り乱すことはなかった。真意の見えない、穴のような瞳で彼を見つめた。

「何をおっしゃっているのかわかりません。あれを見に、お客様はいらっしゃったはずなのに。どうしてそれを悪いことのようにおっしゃるのでしょうか。」

「何を言ってんだ！お前は、狂ってんのか？ここの奴らは、頭がおかしい！」

「頭がおかしいとしたら、それはあなたです。お忘れのようですので、申し上げますけど、あれを・・・あの人形を持っていらしたのは、あなたご自身ですよ。」

「人形？」

人形、と案内係は言った。しかし、ガラスケースに入っているのは、どう見ても人形などではなかった。

「人形なんかではない。これは、私の妻だ！」

「ええ、あなたは、そう言いました。『人形なんかではない。これは、私の妻だ！』まったく同じセリフです。あなたは、人形をご自分の妻だと思い込んで、『大切な妻を永遠に、ここで保管して欲しい』とおっしゃりました。だから、私たちは、奥の切断機で、あの人形を、あなたの奥様を切断して、あのように入らケースに所蔵したのです。すべて、あなたの依頼でした。けれど、あなたは狂ってしまった。自分のことも、何もかもをまったく別な風に誤解して・・・あなたが、異邦人ですって？あなたこそ、この博物館の館長ではないですか！」

案内係は、ほとんど叫ぶようにそう言い放った。男は、混乱のあまり、ふらふらと立ち上がったと思うと、再び、ぱったりと床に倒れた。

切断機

彼が床から倒れた状態で見えたのは、壁の奥に設置されている切断機であった。彼は、涙に濡れた目で、その姿を見つめた。切断機は、カタカタという小さな音を立てて動いていた。しかし、それは、今切断をしているというのではなかった。それは、次の切断のための準備をしているのであった。常に動いて、油を差していないと、切断機はすぐに錆びれ、いつでも美しい断面を描くことができなくなってしまうのである。男は、そのことをよくわかっていて、切断機は、高さは3mを超え、横幅も2mはある。はたからみると、大きなミシンのようで、ベルトコンベアーが常に動いている。ベルトコンベアーは、左右に2枚用意してあり、そのベルトコンベアーのつなぎ目に合わせて、切断したいものを固定して動かすと、20cmほど動いたところで、鋭い刃が待っている。それで左右対称に物を切断することができるのである。しかし、刃の前に重要なものがある。それは、3mの高さから噴射される洗浄液である。洗浄液に物質はさらされ、鋭い刃の洗礼を受けながらも、なお洗浄液は物質に噴射され続ける。それは、切断面を素早く洗い流し美しくするだけでなく、液体を固定化する固着液の役割もしているのである。刃はダイヤモンドが加工されており、どんなものでも切ることができる。そうして、あらゆるものが切断されながらベルトコンベアーに乗せられていくのである。切断され、見事に2つの物体に分かれたものたちは、やがてまた一つのガラスケースのなかに収納され、展示場所まで運ばれるまで、そこで待機するのである。

「どうしてもともと一つのをわざわざ二つに分断して、それを愛情なんて呼ぶんだ？」

「それは、私たちよりも、あなたのほうが、むろん、わかっているはずですが、館長。」

切断機のベルトコンベアーが動きだし、切断機のカタカタという音は次第に大きくなっていった。案内係は、切断機の音に負けじと声を張り上げた。

「あなたは、全てをご存じなはず。」

「私は、わからない！私は、狂ってしまった！この世界のことが、よくわからないんだ！」

男も声を張り上げるが、しかし、その声が案内係の耳に届いたという保証はない。案内係は、無表情だった。そして、案内係は、ふと切断機を見上げると、その鋭い刃をまぶしそうに見た。そして、切断機のほうへいそいそと駆け出すと、ベルトコンベアーに片足を乗せた。

「何をしているんだ！やめろ！」

「館長、申し訳ありません。私は、自分では、左右対称にすることができません。館長、お願いいたします。」

男は、案内係が何を言っているのかよくわからなかった。案内係は、ゆっくりと滑り出すベルトコンベアーの上で、あれこれと体勢を変えている。やがて、案内係はベルトコンベアーに尻をつけて座ると、両足はベルトコンベアーから下ろし、上半身はぴったりとベルトコンベアーに着け、両手はベルトコンベアーの端をそれぞれつかむというスタイルに落ち着いた。何かつぶやいているようだが、男には聞こえない。顔をぴったりとベルトコンベアーにつけているのだ。切断機の頭上部分から洗浄液が勢いよく噴射される。もうすぐで案内係の頭に刃が届く、その一瞬のことだった。

博物館内に、けたたましい警戒音が鳴り響いた。男は、切断機の複雑なケーブルを切り裂いていた。その手には、大きな斧が握られていた。ベルトコンベアーどころか、切断機は、電力を失って、微動だにしなくなっていた。

ベルトコンベアーから顔を上げ、切断機から飛び降りた案内係の顔は、輝いていた。斧を持った男の顔を見ると、子供のような甲高い、理性を失った笑い声をあげた。

「なるほど！あなたの、本当の意図がわかりましたわ！」

男は、青白い顔をしていた。切断機を斧で何度も何度も殴りかかった。そのたびに、切断機は、ほんの少しづつ削りカスを出すものの、全体として、ほとんど傷を与えることはできていなかった。

「ああ、本当に」

案内係は、うっとり嬉しそうに叫んだ。男は、構わず斧を振り回している。

「これで本当に、立派な博物館になれましたわ。」